

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	柔道部々報
Author(s)	
Citation	龍南, 192: 43-51
Issue date	1924-12-24
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8775
Right	

柔道部々報

部の報告を無味乾燥なりといふ勿れ。我等が綴る一言一句をさぐれば慘々たる血涙のにちめるあり。魂は常に暗懣たる京洛の虚空にさまよひ吾人のほかなき夢の跡を思ふ

大正十二年度

委員 小林 政利

上田 孝嘉

選手監督 小旗 直

●京都遠征

七月十二日

山陽線三田尻附近汽車不通なりといふ。憂ふれど致し方なく、暫時待つうちに午後三時三分の急行が特急に連絡する頃までには開通すべしといふ。案じつゝも切符を求めてこゝに健兒一同急々遠征の途につく。

選手氏名左の如し。

下村 先生 小旗 監督

小林 政利 上田 孝嘉 松本 朝明

光島 賢正 石川 英輔 金子 幸夫

角松佐太郎 若林 持一 赤木 延一

重富 慶 池田 二郎 篠原 智雄

七月十三日

午後零時五十分京都驛着。

見よ選手の眉宇にみなぎれる殺伐の氣を。

三高。四高。五高。六高。七高の諸先輩の人の氣を探るが如き眼光の注視の中に悠々と

構内を出でて大西合宿に至る。

午後武專にて輕き練習をなす。あゝ刻苦一年屢勉止む事なかりし過去の練習の效果の

今現る、べき日は愈々近くになりぬ。心おどるも亦宣ならずや。

七月十四日、

午前武專にて練習す、

竹村(兄)三段、竹村(弟)二段、島井二段、金子二段、吉木初段の五人の先輩の色々と注意ありき。

あゝ洛陽の夏正に酣にして五高の精粹たる

吾が柔道部の健兒が活躍すべき一星霜後の

榮ある舞臺は次第に回轉しつゝあり。

七月十五日

午前十時大學生集合所にて茶話會あり。集

り來るもの已に殺氣満々たり。曰く四高田谷、市川、曰く六高一宮、早川、曰く七高

海村等曾つて面識ある強敵を一睨して靜かに所定の席に就き、小林吾郎を代表として

挨拶す。番組は抽籤によりて定り、我等は

十七日 對福岡

十八日 對佐高

となる。

あゝ山雨將に至らんとして風先づ樓に滿つ

天下の霸權を握らんとするものは誰ぞ、彼

乎、我乎、

あゝ雪辱。彼六高を葬れ。

七月十六日

京一中にて練習す。合宿に歸れば七高大敗

し、四高はやうやく北大を破り、醫大は福

高に勝ち、佐高は雄々しくも八高を屠りぬと。

あゝ高鳴る青春の血や、盛なる意氣の潑瀾

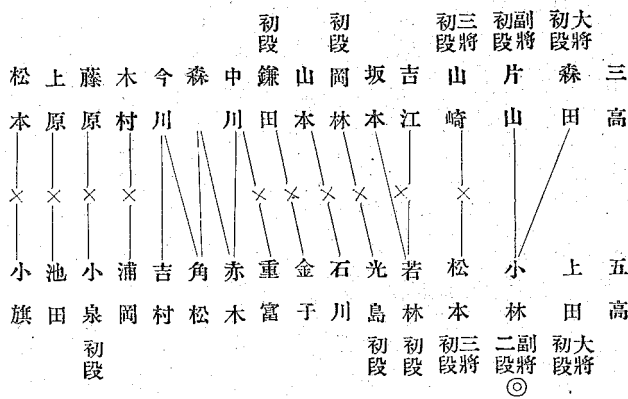
たるもの何ぞそれ爆裂せしめて止まんや。

七月十七日

午前中輕く練習す。本日の相手は若冠福高

なり。戦はずして敵陣亂る。

七月二十日



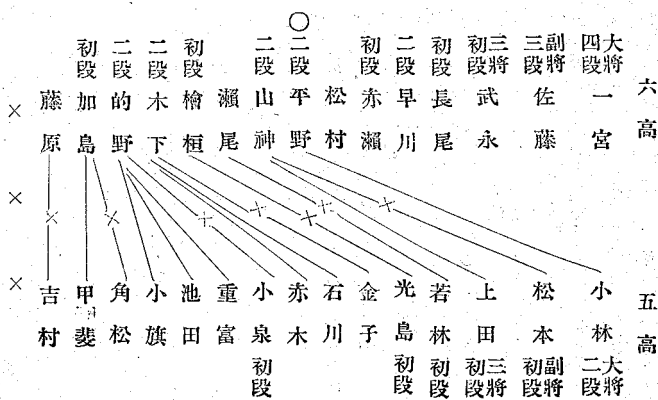
5.

やがて時は來れり。一年の刻苦見事に敵を
蹴破るか將又雄圖空しく血涙に咽びて南方
に退き歸るか、二者何れか一つ。あゝこの
時に及びても勝たざるべからずてふ一語は
なほ我が腦底を去らざりき、

やがて時至り一轉して兩軍火蓋を切る。あゝされど、あゝされど出する若武者無慘や枕をならべて戦場の露と消れて吾軍亂るること甚し、バラ／＼と花武者の前にたつ鬚武者二人三人赤木倒れ上田敗れては又如何とするの術なし。頼んだる松本、山神と引分くるに及んでは小林最後の決戦にうつる。火花を散らす事數十分遂ひに彼我を倒して靜かに席にかへる。哭するに聲なく咽ぶに涙なし。一年の星霜は徒らに地に消れて夏草新らに武夫原に生ふれど、勇み出でし若人の武道もろく長安の岸に散りて加茂の水ために悲しむに似たり。

夜先輩の催されたる慰勞會にのぞむ。何たる苦がき盃ぞ。何たる物淋しき宴の夜ぞ。あゝ、繰り返すまぢきは敗者の悲哀なり。

大正十三年度



委員	若林 持一
選手監督	池田 二郎

○柔道大會

赤木 延一
山田 勝

九月三十日

第二回中等學校柔道大會を催す。今年も亦紅白優勝試合を許されず個人勝負のみを行ふ。

参加校は、熊本中學、濟々嶺、熊本商業、第一師範、鹿本中學、鎮西中學、玉名中學、尚縣外より福岡縣立明善校、全傳習館の九校にして昨年に比して多し。個人勝負終りて(その成績は畧す)、選拔勝負を行ふ。成績次の如し(第四回戦までは畧す)、

第五回戦

優勝戦

○矢野 不戦
河村

○矢野 林

○西原 林

○河野 矢野村

○河村 矢野村

右の戦績により熊中の矢野優勝す。

○稽古納會

十二月十日

大正十二年の稽古はいよいよ本日に終ります。部員を二組に分ちて紅白試合を行ふ。試合後、さやかなる茶話會を開けり。

(大正十三年)

敗辱の年は去り新たに復讐の年を迎ふ。年を逐ひて隆盛となりゆく五高柔道部に未だ足らざるものあり。そはかの紫紺の優勝旗なり。

惨めな忍辱、されど忍従の冬の日の終には新しく希望にもにたる春の訪れ来るを知れ我が友よ。只その一言を胸に秘めて共に苦しき試験にたげん。

○寒稽古

一月十一日——三十一日

本日より寒稽古を開始す。出席者多く氣持よろし。例年寒稽古は早朝行ひしも、それ程の能率も上らずとして昨年は三時より行ひたれば本年もそれによりて三時よりなす寒風雪を交へて肌をつき、疊は冷くして足に針をさすが如し。されど忍び忍びて三週間を終へたる時、何をかもつてその喜びにかねん。

皆勤者

若林 持一、山縣 寛雄、池田 二郎
山田 勝、篠原 智雄、吉村 義人
浦岡 與助、秋根 昌之、岡 直身
井上 運二、森 榮吉、多々野忠之

(以上選手)

宮本 正記、三堀 三郎、毛利 薰人
岡部 禎二、森 國樞、渡邊 明
島井 作吉、柳 正夫、太田尾廣治
山崎 英雄、岡本新一、中島六右衛門
大山 岩男(以上非選手)

○豫餞試合

二月九日

春雨霏々として濟美館はうるほふこの日、我が精銳なる小林、松本、上田、光島、金子、石川、小旗、角松の諸氏を送るために名残の試合を催す、先輩軍に配するに高工選手をまちへたれど意氣旺盛なる現役軍に敵すべくもあらず、勝は現役軍の手にありき。

試合後茶話會をなし、新委員若林君の挨拶ありついで舊委員小林君の答辭ありき。これまで一年あるひは二年共に笑ひ共に泣き

互ひに勵まし、慰め合ひたりし者の三年の業を終りて今將に此の龍南を去られんとす送る者、送らるる者轉た感慨なきを得んや去りゆく諸兄よ、愈々別れの時は至りぬ。三年の兄等の勞をれざらふには餘りにさ、やかなる宴なれど我等の意あるところをくみたまひて心ゆくばかり過されよ。終りにのぞみ諸兄の上に一層幸あらんことを心より祈る。

○昇段者

二月十六日武徳殿に於て、昇段者の免狀授與あり。

小林 政利、上田 孝嘉、光島 賢正
若林 持一、小泉久太郎、

右講道館二段に列す。

石川 英輔 金子 幸夫、小旗 直
角松佐太郎、
右講道館初段に列す。

○集會所合宿

自三月十一日
至三月三十一日
待ちにし春の休みは來りぬ。されど我等選

手には休みもなし。試験終了後は直ちに集會所にてこもりて猛練習にうつる。

臘月の夜疲れにし身体を芝生の上に投げ出す時の心持を誰ぞ知る。人は皆浮き立ち、て月よ花よと狂ふ時精進の道の苦しきになく若人の涙を誰ぞ知る。

○佐世保遠征

四月三日

豫備海軍中佐柏木氏の幹旋にて佐世保海兵團の猛者連と試合をなすため、下村師範、宮嶋、龜田、小旗の諸先輩と共に八時上熊本を出發す。此の日は軍港見學に日を費し夜は早くより臥床に入りて英氣を養ふ。

四月四日

九時より試合開始。敵の強力にはたゞ驚くばかりなり。残念ながら破れたりとはいへ赤木、吉村の兩初段を加ふれば充分勝てりと信す。

五 高

海兵團

大將

若林

藤崎

大將

重 富

小 浦

副將

○新入生歡迎會

四月十二日新入生歡迎試合を行ふ、濟々覺の生徒も參加し、紅白試合を行ふ、新入生の參加少なかりしは遺憾なりき、當日の成績によりて

一 等 山崎 君
二 等 多々野 君
三 等 品川 君
宗 君

として粗賞を呈せり。

井 田 浦 岡 山 井 重 小 具 篠 山 池	上(運)	中	岡	田	上(秋)	元	泉	島	原	縣	田
湯 福 薄 般 田 深 鈴 武 井 上 田 中 小	前	田	田	津	川	山	藤	上	中	嶺	嶺
三 雲	初 段	初 段	初 段	初 段	初 段	二 段	初 段	初 段	初 段	二 段	參 將

四月二十六日

本日講道館熊本役者會主催の紅白試合あり我が部よりの出演者二十名、五高軍の奮闘目覺ましく、重富君の牧野二段に勝ち、内村三段と引分したるは特筆に値す。試合は結局五高側即ち紅軍の勝利となる。この紅白試合の出演者總數約八十名にて盛大なりき。

○武德會熊本支部春季
演武大會

五月二十五日

武徳殿に演武大會あり。一同出場す。五高軍の奮闘例の如く個人勝負は一二を除く他皆勝ち万丈の氣を吐けり。此の日選拔勝負は重富重元が二三等を夫々獲得す。

○對醫大戰

挑戰を申込みし高工との戦ひは相手方人数揃はずとて中止し、六月二十一日醫大と試合をなす。五高側一二年を主体となして編成す。京都遠征を目睫の間に控へ我軍の勢に如何にして對抗し得べき。不戦三名を残して大勝す。

醫大

五 高

初段 初段 初段 初段 初段 初段 初段 初段
大將 副將 副將 副將 副將 副將 副將 副將
鈴木 宮原 青木 梅田 鹿毛清 成清 鹿毛 坂本 中井 下村
×
太田
重富 山縣 重元 井上秋 井上運 田中 中村 龜嶋 新關

○京都遠征

七月十日

本日にて試験も終り午後一時一同道場に參集す。肉は落ち、頬は瘦せ顔色蒼白にし而もその眼光の炯々たることよ。あゝかくまでに心身をついやすもかの勝の一字あるのみ。

一昨年手にせし優勝盃にて一同別れの否出陣の盃なくむ。一種のいねぬ感慨の胸にせまりて肅然として必勝を誓ふ。終りて校長

石田先輩の激勵の辭あり、共に寫眞を撮りて紀念となす。あゝ時は來ぬ。あゝ時は來れり。待ちにし時は來りて而て我等が準備も成る。何ぞこの時は來りぬといふ數語のうち到我等が筆紙に盡し得ぬ感情の溢るゝ事よ。

十三日

出發の準備に何かと急がし。午前校長及び
師範のお宅をお訪ねしてお別れをなす。一
同黙々として言ふべき言葉を知らず。

午後三時三分

一年の苦楚を経て今こゝに我等は遠征の途に就く。今に至りて何をかいばん。あゝ、我が懐かしき龍南よ、親しかりし濟美館よ、燃然たる優勝旗もて汝を飾らん日の近まりしを喜ぶ。

見送りの人々の柔道部万歳の聲を後にして
沛然と降りしくる雨中に我等は東に走れり
こゝに校長を始めお見送り下され諸氏に深
く感謝す。榮ある氏名左の如し。

下村師範
山田監督

若林 持一 赤木 延一 小泉久太郎
吉村 義人 重富 巖 具島兼三郎

山縣 寛雄 池田 三郎 篠原 智雄
重元 巖 岡 直身 井上 秋水
井上 運二 多々野忠之 中村 豊治
龜嶋 哲男 太田太七郎 野見山卯吉
栗生 謙二 吉村 重助 深水 千浪
末永徳之助 新關 勝芳

十三日

午前十時半目指す洛陽の地に恙なく第一步を印す、多數先輩のお出迎へあり。

あゝ如何ばかり今日ここにあるの日を待ちしか、ここにかくあり而して、かの優勝旗を握らんがために一年の精進の生活をおくりしなり。あゝ今我等ここにあり。全身は極度に緊張す。正午合宿所吉田二本松町吉田方に着す。

十五日

大學學生會館にて型の如き歡迎會あり。抽籤の結果山口高と六高とにあたる。六高とはもとよりのぞむところにして一回戦にて彼六高と組むもそは眞の意味に於て本大會の優勝戦なり。一同欣然としてそれをよろこぶ。吾人戦ふべし、彼六高に勝たずして

如何とするや。

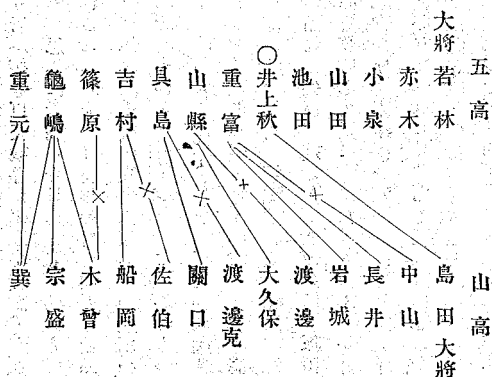
△對 山 高 戦

十七日 明けたる日は麗かなり、絶好の試合日和 正午カーガー交換さる。山高何するものぞ只一撃に粉砕せん哉。

午後一同打揃ひ、師範先輩を先頭に堂々として武徳殿にのぞむ。ゆるやかに壯重に我等が高誦する部歌のひゞきに、戦はざるにはや敵を歴し殿裡の人々の心胸にあるものを強く叩せしむ。午後三時稻葉五段審判の下に幕は切つておとされぬ。

先鋒多々野敵を引き込み得意の逆にうつちんとする相手の軀大なるため惜しくも絞に敗る。續く中村肯負ひの一本鎗にて攻めたてどつひに抜くを得ず引分く。ついで重元難なく迎込みて一本を勝ちしも續く相手に後に廻はられ送り襟にたはる。次いで龜島新進の氣英なもち榮望を貰ふて立つ、見る間に二人を倒し三人目にあたる、接戦しばし嘸と叫ぶ氣合諸共小内刈きまつて敵はまりの如く投げ出されしも何故か審判員は一本にとらず一同不審の眉をひそむ。そのうちに彼も疲れて惜しくも引き分く。

中堅、吉村、具島、山縣出づるに及んでは敵は爲す所を知らず、徒らに喰ひ下りて引分けんとのみつとむれど皆二人づゝ引きうけて之を片附く。重富出づるや元氣溢るゝばかりの彼の掛聲にて敵を呑み、敵をして一隙をも與へしめず遂に副將まで迫りて之と引き分く。井上、敵大將とあたる。小艦をもつてよく攻め難なく之を抑へ、不戦五名を残して大勝す。



中村 藤田
多々野 谷井

悠々と高誦する部歌の都大路にひびく事よ
その凱歌の榮光につゝまれて胸はたゞ感激
にのみ高鳴る。

されど意を安んずる勿れ。明日の對六高戦
あるを思へ。

△對 六 高 戦

十八日

一同極度に緊張す、例によつて正午オーダー交換さる。六高のオーダーをみるに彼が一昨日八高に對せし時のそれに比ぶる著しく緊張し之が彼のベストメンバーなるを知る。強敵六高をしてかくまでにその心膽を寒からしむ。この戦が眞の優勝戦にあらずして何ぞや。

午後三時戦は稽業五段審判の下に開始されぬ。殿上立錫の余地なく萬場の衆目を集め何一の雜音もひびかずたゞ血を吐くが如き氣合の靜を破るのみ。

戦は最初より猛烈なり、抜きつ抜かれつ互ひに秘術をつくして輸贏を爭ふ。されど中堅に至りて山田敗れ具島拔かず山縣右肩を

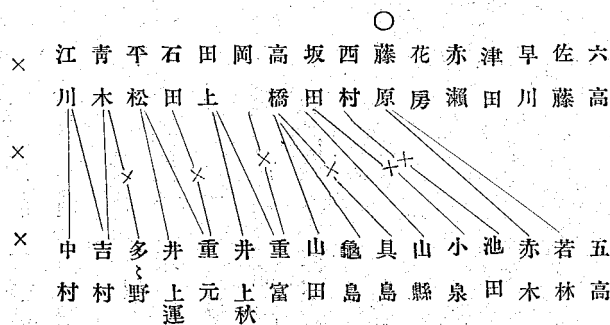
脱臼して倒れ、續く小泉、強く後頭部をうつてより意の如く身体の自由きかず遂ひに引き分くるに及びては大勢已に決しぬ。赤木奮闘し、敵の豪者藤原をして腰ゝ窮地におとし入れしもその甲斐なく送り襟に敗れ若林大將をして堂々二十有餘分正に引分けの第二鈴のひびかんとする時綫に倒れぬ。

あゝ我等三度彼六高をして名をなさしめぬ一度は榮ある月桂の冠をいたゞきてこゝに乱舞したり、二度は常勝軍四高を破りてこゝに高誦しぬ。今にして年を経て來りし十五の戦士の慘として地に伏し戎衣を涙もてしぼるばかりなり、勝者のよろこびにうちふる手にロイヤルをうけし時の感嘆に過ぎてこの敗者の悲哀は吾人の胸奥に深くわだかまるものかな。嗚咽にむせびて吾人の恨みは六といふ字にのこりぬ。あゝ男子生れて選手たる勿れ。選手となりて敗る勿れとは誰が謂ぞ、万事を放棄して一途精進の道にいそしみたるに、はからざりき。兀々たる岩石の道を祖みて吾人の希望を遮るとはさばれしか歎く勿れ。我にはまだ鋭き鵜嘴あり磨けば鋭利鐵をも斷つ刀あり。山を切

り岩を拓き以て我等が素志を貫徹すべきなり。思ふに六高の今日あるも一朝にして成れるにあらずそは連年の血と涙との結晶なり。傳へ聞く彼の練習に際しての態度をかんがみそれより一層の眞摯なる心をもつてなすにあらずれば、我等が事業を大成する能はず。盛者必滅と古人は説く。彼六高來年は佐藤、早川、坂瀬、藤原、花房、江川の諸將を失ひ、残るところ僅かに。坂田、高橋等にして實に寥々たりといふ。絶好の機會なり。來年は一撃の下に破りて天下に霸をなすべきなり。而して同時に忘る勿れそれ血と涙との代償なることな。

夜、悲しき宴は加茂の畔に開かれぬ、常は美き酒も今宵は何よりも勝りて苦し。流し行く三昧の音は責めるが如く嘲けるが如くに薄ら闇の中を漂ふ。默然として座にある事數刻。月は東山をはなれて今中天にかゝり冷然として吾人を見る。敵を斃したる者この月と高誦乱舞しこの月をよすがとしてその悦びをあらはせどあゝ敗れたるもの如何にしてその万斛の恨みをはらすべきか。選手たるもの敗る勿れ。

先輩諸兄よ。
私等は三度六高のために敗れました。出来るだけの努力をしてゐたつもりでおりましたが、まだ私等が至らない所があつたのでした。又々龍南柔道部に消すことの出きない汚點をつくつた事を深く御詫びする次第



でございます。併し、諸兄よ。私等はかの意氣と感激との殿堂をかたく把握してゐる若人です。この身體に若人の血の燃はてゐる限り又私等が濟美館に立籠つてゐるかぎり必ずやかの優勝旗を手にして止まないものであります。幸に今年はまだ精銳な選手が數多残つております。努力すれば必ず來年は天下に覇をなし得るものであると確信しております。それにつきましても、諸兄の激辭に接するのは此の上もなく私等を感奮さすところのもの御座います。から諸兄にも出來るだけ私等を叱咤激勵下さるやう幾重にも御願ひ申します。終り臨みこれまで種々御援助下さつた事を厚く御禮申上ます。

(山田 勝記)